



京都教区の皆様へ

2020 年 4 月 9 日

2020 聖木曜日 主の晩餐 説教

今、世界中が新型コロナウイルス感染症のパンデミックの困難な状況にあり、多くの国で外出禁止措置が取られ、もちろんカトリック教会でのミサもできず、この大切な聖週間典礼に信徒は与れない状況です。京都教区の信徒の皆さんも、この四旬節は、すでに数週間も、ミサに与れず、聖体拝領ができない状態です。今年は司祭達がそれぞれの教会で、信徒の皆様と心を合わせて、主の過ぎ越しの聖なる三日間の典礼を行います。

今宵、わたしは、イエスがパンを裂いて弟子たちに与えられたことについて、皆さんと黙想したいと思います。パンを裂く。これは、イエスがご自分の命を犠牲にされる象徴だと言えます。ご聖体は、十字架上で命をささげられた、主イエスのパンです。主イエスは、ご自身が神の小羊のいけにえとなり、十字架の死を引き受ける覚悟で、弟子たちに、パンとぶどう酒を、ご自分の御体と御血としてお与えになりました。イエスがパンを裂かれたのは、弟子たちに分け与えるためです。イエスは、「取って、食べなさい」と言って、裂かれたパンを弟子たちに差し出されました。自らの肉を裂き、血を流し、自らを罪人に与えてくださるのです。イエスは、ご自分の愛を、一人でも多くの人が、いや、すべての罪人が受け取ることを望まれたのです。

ですから、わたしたちはこのパンを、罪人であるわたしのために渡されたパンと思い、謹んで受け取らなければなりませんし、また、すべての人と一緒に受け取らなければなりません。このパンは分かち合うものです。一人占めしてはいけないパンです。兄弟姉妹と分かち合うものです。わたしたちは、自分だけが幸せになるために生きているのではなく、隣人と一緒に、すべての人とともに幸せになるために、今日も生かされているのです。このパンを受けるわたしたちの中で、イエスの愛は、己を他者に与える力へと姿を変えていきます。イエスは最後の晩餐の席で、「私は仕えられるために来たのではなく、仕えるために来た」と言われ、弟子たちの足を洗われました。わたしたちは、主イエスに足を洗われたものとして、兄弟姉妹に仕える使命を受け取りました。

だから、わたしたちキリストの弟子は、ただ集まって、主の出来事を記念し、主のからだを受け取り、主が残された教えを守るように、互いに励まし合うだけでは足りないのです。イエスのパンをいただくわたしたちは、イエスの愛を目に見える形で、多くの人のもとへ運んでいかなければなりません。信徒の相互の交わりは、仲良しクラブではなく、本質的にイエス・キリストとの交わりを基本とした信徒同士の交わりなのです。キリストの教会は、主そのものを受け、自分の生き方ではなく、パウロが言うように、「もはやわたしが生きているのではない。キリストがわたしのうちにあって生きている」ことを、教会共同体として、証しするのです。このキリスト者の一体感が、「信者たちは皆一つになって」とか「すべての物を共有し」「皆がそれを分け合った」、「毎日ひたすら心をついにして」、「家ごとに集まって」、「一緒に食事をした」。そして「日々仲間を加えて一つにした」と聖書に描かれているのです。

今年は、「洗足式」は行われません。イエスから霊的にわたしたちの足を洗っていただきましょう。今、イエスは、世界中のコロナウイルスに感染した病人のために、日夜身を削って働く医師や看護者、病人に寄り添う人々のもとに駆け寄り、その足を洗うでしょう。信徒の皆さんは、今、心の中で、自分の足を洗ってくださるイエスさまの姿を思い起こしてみましょう。ご聖体を頂く私たちが、その意味をまだよく理解せず、またその恵みに十分に答えていないことを反省しながら、イエスに足を洗ってもらい、霊的聖体拝領をしましょう。

✠ハハに天呼喜直